

漢書

班固（西暦32-92）／漢書（かんじょ）の地理志第八下燕地の章の全文。後漢のはんこ、前漢時代を記述対象とする歴史書。

山海経

逸名（BC300s-AN200s）／山海経（せんがいきょう）卷十二、海内北経の章の全文。。最古の地理書とされる。漢代のころに成立したものらしい。

*注釈は西晋の郭璞（かくはく）の著述。

論衡

王充（27-100c）／論衡（ろんこう）卷八儒増篇、卷十三超奇篇、卷十九恢国篇の各章の全文。後漢のの著。おうじゅう、

後漢書

范曄（398-445）／後漢書（ごかんじょ）東夷列傳の本文と注釈の全文。南朝劉宋。はんよう、三国志より後に記述されたもの。

*注釈は唐代の李賢らによる。後漢書光武帝紀下、安帝紀にも倭が登場する。

王沈（?-266）／魏書 全44巻 *おうしん 断片として残っている

魚豢（200s-270s）／魏略（ぎりやく） ぎょかん *三国志 裴松之注も引用

*曹植（192-232） *そう しょく、そう ち

三国時代の魏の皇族で、曹操の五男（生母の下夫人が正室に昇格すると正嫡の三男となる）。字は「子建」。

父・曹操（155~220）、兄・曹丕（187~226）

三国志 魏、呉、蜀 魏史・倭人伝

陳寿（233-297）／三国志（さんごくし）烏丸、鮮卑、東夷傳の本文と注釈の全文。西晋、ちんじゅ。いわゆる魏志倭人伝と呼ばれるもので、邪馬台国関連の基本資料。

*紹熙（しょうぎ）本：邪馬壹（やまいち）

*紹興（しょうこう）本：邪馬臺（やまたい） *臺は魏臺と称するように、王朝を意味する。

*注釈は南朝劉宋の裴松之（371-451）によるもの。はいしょうし、三国志三少帝紀にも倭が登場する。

晋書

房玄齡（578-648）等／晋書（しんじょ）ぼうげんれい、列傳第六十七の東夷部分。唐の太宗の時代に編集したもの。

宋書

沈約（441-513）／宋書（そうじょ）列傳第五十七の東夷部分。しんやく。同時代資料。本紀第五、本紀第六、本紀第十にも倭国が登場する。

*倭の五王

南齊書

蕭子顯（487–537）／南齊書（なんせいしよ）列傳第三十九の東夷部分。梁のしょう しけん。同時代資料。

梁書

姚思廉（557–637）／梁書（りょうしよ）列傳第四十八の東夷部分。よう しれん。本紀2などにも倭国が登場。

隋書

魏徵（580–643）等／隋書（ずいしよ）列傳第四十六の全文。唐のぎちよう。隋書の版本（汲古閣本等）によっては、“倭国”ではなく“倭国”（たいこく）。

*倭国の自称、大倭/tai-wi/の音を写したのものかもしれません。帝紀卷三などにも倭が登場。

*阿蘇山と書かれているので、邪馬壹は、九州。

南史

李延寿（-650s-）／南史（なんし）列傳第六十九の東夷部分。りえんじゅ。宋本紀中卷二などにも倭が登場する。七世紀半

北史

李延寿（-650s-）／北史（ほくし）列傳第八十二の全文。りえんじゅ、七世紀半

翰苑（-650s-）

張楚金（撰）、雍公叡（注釈）／翰苑（かんえん）蕃夷部の一部。唐、ちょう そきん。よう こうえい

*現在残る写本は、平安初期とされる（大宰府天満宮に伝世）。

*国宝の貴重書ながら、中身は遺漏が多く、かなり杜撰。例えば、倭の字を「倭」と誤写している部分が何か所かあります。

通典

杜佑（735–812）／通典（つてん）東夷上の倭の部分。唐、とゆう。

旧唐書

劉昫（887–946）等／旧唐書（くとうじよ）列傳第一百四十九上の全文。五代、りゅうく。列傳三十四にも倭が登場する。

新唐書

歐陽脩（1007–1072）等／新唐書（しんとうじよ）列傳第一百四十五の日本伝。北宋、おうようしゅう。列傳三十三にも倭が登場する。

その他の資料

百済人・祢公墓誌銘（ねいこう、でいこう）